



## タンチョウ博士のお話 (第30回)

### 恩返しのツルは、なぜ見るなと言って部屋にこもり、 覗かれて飛び去ったのか？

今年も舞鶴遊水地でタンチョウのヒナが飛べるまで育ち、育雛成功が3年連続となる日も目前です。目前というのは、育雛成功の判定は11月まで育った場合を基準としているからですが、この基準は、ヒナの生存率などから私が勝手に決めているものです。

さて、2020年に町で最初に育った子は現在2歳5か月ほどで、ふさわしい相手を選ぶ“婚活”を始めなくてはいけないお年頃です。実は、このお年頃に一つ大変なことが起きます。それはこの広報の2019年10月号でも触れた「換羽」、つまり羽の生え変わりです。何せ、羽毛は皮膚の変形で、薄く、軽いものなので、こすれたり、汚れたり、折れたり、寄生虫に食べられたりと、年月とともに保温や飛行に適さなくなります。特に翼の大きな「風切り羽」がそうなっては、飛ぶのに困ります。

そこで、樹上や高いところに止まって暮らす鳥は、飛ぶのに差しかえない程度に、時間をかけて、風切り羽を少しずつ換えます。櫛の歯が欠けたように、翼にところどころ隙間のあるまま飛んでいるカラスなど、皆さんも見たことはありませんか。

ところがタンチョウは、飛ぶのに欠かせない風切り羽を5～6月頃、1～2日で一挙に脱落させます。その変化は、大きな翼を持つトリから(図1)、背丈150cmほどの、小袖の普段着姿の娘への“変身”を容易に連想させます(図2)。しかし、大変なのは、トリが飛べなくなる！です。もしこれが、樹々の間を飛んで暮らすトリなら、餌も取れず安全も保てず、まさにおしまいです。が、タンチョウは餌を採るのも夜眠るのも地上ですから、暮らしには困りません。

でも、敵から飛んで逃げることはできません。ツルの身になって言えば、それが「見るな！」の禁制につながります。つまり、羽の抜けたツルは、なるべく敵に見つからないよう(民話では、機織り小屋)に隠れ、日々を過ごします。



図1 風切り羽の正常な翼  
(撮影：赤間優歩)



図2 風切り羽の抜け落ちた翼  
写真はいずれも舞鶴遊水地のタンチョウ  
(撮影：正富欣之)

換羽は成鳥になっても1～2年おきに起き、舞鶴遊水地のツルも昨年は初夏に2羽ともほぼ同時に換羽しました。その頃は、毎日調査で遊水地を訪れていた人も、なかなかツルを見つけれませんでした。

しかし、ついに姿を覗かれる日が来ます。飛べなかったツルも、1か月半前後で新しい羽が伸び、また飛べるようになります。ヒトに見つかったツルは、危険を感じたのか、その場から飛び去ります。これが「ツルの恩返し」の結末です。

こうしてみると、荒唐無稽と思える民話の筋書きにも、ツルの実際の暮らしが背景として色濃く残っている気がします。でも、これまで述べたことも、まあ、ヒトが作り出した動物報恩譚の「生物学的解釈」の一つに過ぎませんが…。(文：正富宏之)

【問合せ】役場企画政策係 (☎76-8015)